

リ 5
1648
2



門 伊呂
號 7268
卷 2

皇 皇 皇
皇 皇 皇
皇 皇 皇

射を唱へ慶賀聲と成り響けり親王以下次を以て連ふ
云云 宸儀ふ比と也及見處形一左京大夫紀朝臣
守山城國愛宕郡乃郡司百姓等を率以耕田乃禮を東
垣の外ふ行以農夫乃辛苦と稼穡の艱難を敷陳あく春
遊の興を副竊ふ官師相規工執藝事以諫乃意を合め里
夜了至る 車駕還宮御ぬ是日太政大臣の家令家女房
ふ位を授物を賜ふと品あり 此行奉女或兼備の三月八
日律師最教等起請あく申さく僧乃受戒は月十八日を
以て始行おせん 事一未授度縁乃紫の官符を下さぬと
云共受戒ふ預去め以 事一受戒終る後僧數を奏聞を願ふ
事一戒壇院に印を設く戒牒を捺ん 事一とあり太政官處分

最上誓證

明治三二年
十月十一日
購求

とらく請乃まゝ了せよ但印を東大寺乃印を用ひよと
形也 當時諸宗乃僧東大寺戒壇院に 日月廿一日 諸國
馬を貢入國乃遠近に依り期に亦其行程に從入處を
を定めらば 八月十七日 甲斐德政馬廿日 武藏小野馬廿
也 形也 六月廿三日 信濃國乃牧の御馬を貢期を定
む 八月十六日 信濃勅旨馬廿三日 八月十七日 女御從
位下 藤原多美子乃從三位を授らば

多美子ハ藤原大臣良相乃女皇太后明子乃從妹なり
性安詳ふくく容色美く婦徳を以て称せらば貞觀
五年選ばて宮に入女御と名從位下を授らる然
ハ 天皇乃適妃と云へり

廿又日平朝臣寛子を以て女御と以て 多美子と共了二人
負右四品以上 九月廿日 市籍人乃諸司諸家入仕ふと
を禁らば 臣乃別を明ふと 十一月七日 大和國平城
乃舊京を墾闢とて租を輸とむ

平城宮を元明天皇乃和銅三年菅原乃宮より後とせ
く元正聖武孝謙光仁乃代を桓桓武天皇乃延暦七
年と七十九年 帝王乃都城ありし山城國長岡に遷
させし後七十七年 荒廢乃地と形也 姦民私竊に墾
闢し隱没とて營種とて云共國司怠惰し百姓譎詐し
て數度班田校田乃藉を欺瞞せし 聖明乃威後乍
ふ累年の詭曲を照破ありと云共亦是より元慶

遜退乃藤を脛胎と云へ

七年正月廿二日延暦より仁壽に至るまで六代桓武平
淳和仁明文徳乃親王に十餘人あり給を於年料典史生
乃六代なり各一人輪轉し配給去る麟次を愆せと制ら敷

紹運録を考ふ於し是時桓武乃親王の賀陽親王七十

仲野親王七十賀樂内親王大井内親王紀伊内親王池

上内親王六人平城乃親王高岳親王入道親王巨勢親

王大原内親王三人嵯峨乃親王秀良親王九歳業良

親王志良親王正子内親王淳和太子仁子内親王又人未

淳和乃親王の基貞親王寛子内親王二人仁明乃親王

の宗康親王時康親王先孝人康親王本康親王國康親

王常康親王新子内親王柔子内親王真子内親王平子

内親王重子内親王久子内親王高子内親王十三人在

天皇乃叔父徳乃親王乃惟喬親王惟條親王惟彦親王

惟恒親王儀子内親王惟子内親王迷子内親王濃子内

親王勝子内親王禮子内親王揚子内親王晏子内親王

慧子内親王珍子内親王十四人在以皆是也

三人形皇典史一人を給を於し乃親王乃家人了

諸國乃典史公解二分史生公解一分乃俸を給を於し

云但代親王家人乃其國典史其國史生と称する乃

ふく國務小管係を然也共主典史生乃授記を帶ふ

白丁と一列から依り是を揚名乃任と云里此事今

年まゝ一二年を隔て是を給へ或は數年を徑て稀に
給へ或は内親王を省らせおとせしハ皇親を弱め
宗室乃卑きを庶幾も致執事乃籌策と知る然るも今
如比制玉人の皇族乃繁榮を期せらせんと乃
不起せは尚書鸞臺乃諸良寒心せしり理か
二月十日 詔しつ天安二年より以徃租稅乃未納を蠲

除しむ是を肥後國阿蘇郡神靈池去年十月二日夜無故
沸騰て他縣より河溢たし龜並了兵疫乃凶禍あふ
と告ふ依て鰥寡孤獨不能自存を優賑し缺を據ひ禍を
嫁けらせんる為に徳政を施せんと二十日 秋氣
範を遣しつ幣を豊前國八幡大菩薩に奉らしむ十七日

冬議大枝音人中務大輔忠範王を公階山陵了冬議藤原
良繩兵部少輔源直を相原山陵了高祖皇 推大納言藤原
氏宗民部少輔源頼を嵯峨山陵了曾祖皇 大納言伴善男
散位茂世王を深草山陵了祖皇の 冬儀南淵年名侍從利
基王を田村山陵了父皇の 遣しつ告文を奉ら致兵疫乃
起ら以去て實祚勳かく護むへ終幸え玉へと申せ致
如皇二月七日 勅しつ刑部省を定詔乃司と名付ら致
當時詠詠乃司と名付たりしを判法乃司と稱んと請望
の也は承和廿又日少僧都慧運り申牒不據る僧乃受戒
乃次を定ら致
慧運申牒不允得度也致者不は先度縁を與へ次り入

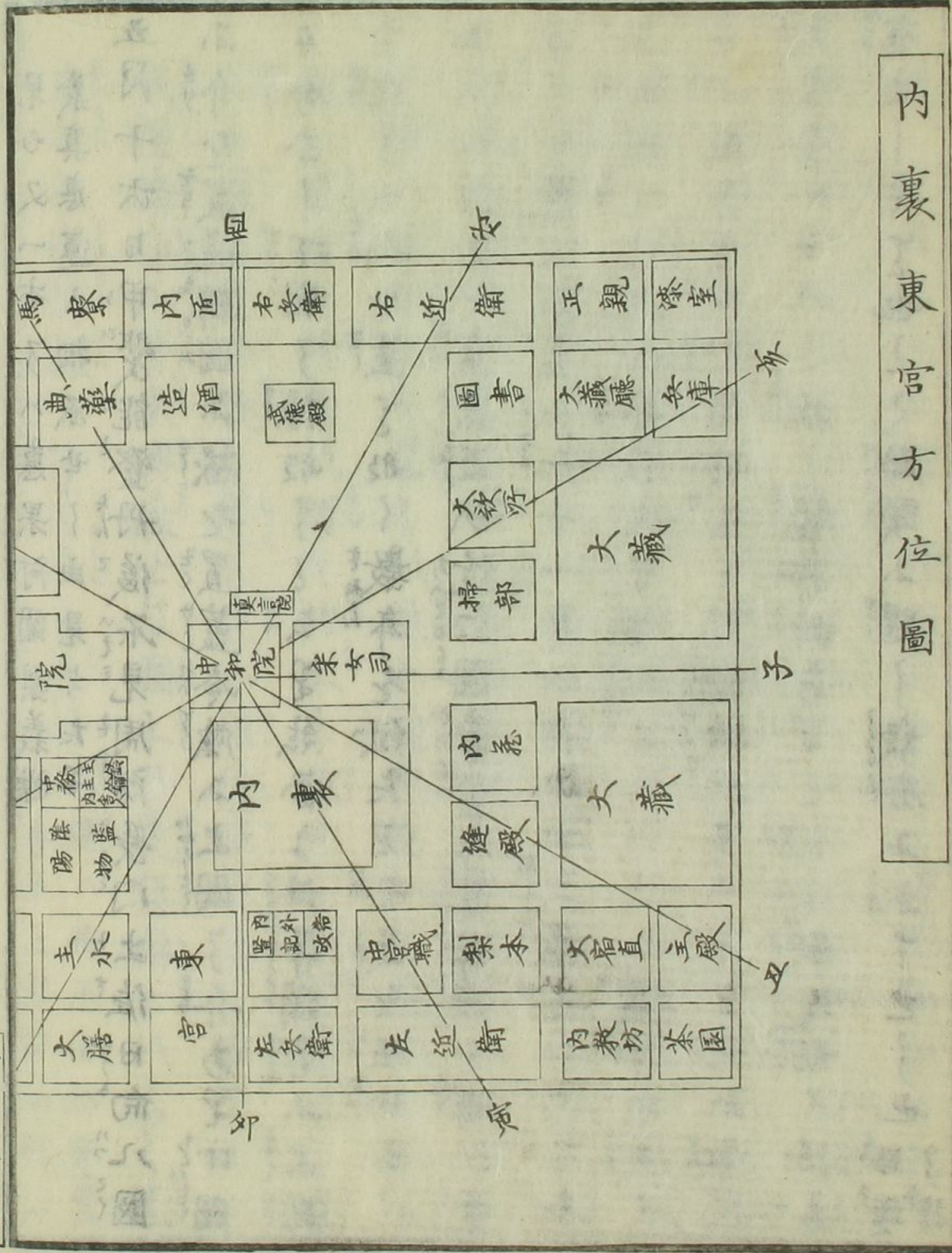
寺せしむ就中ねん分度者どしやハ二箇年にを經臨時度者どしやハ三箇年をを經て述して沙弥しあ乃行をを練ら先に然ら後に初に受戒じゆかいを聽き乃を毎ねん年ご二月に以前いぜん僧綱そうこう諸寺しよし小牒せうだつを放はな且かつ當年とねん受戒じゆかいせしむ者もの乃安名やすなを進すす去る綱こう所しよ會集くわいしゆ志し派部はふ玄蕃げんぱんと共とも名籍なせきを勘かんへ兼かみ法華ほふわ取勝しよしやう威儀いぎ乃を三さん部ぶ經きやうを試しやう更さら小奉寺せうほうし東大とうだい子こ牒だつ廿一日にじゅういちにち悔過けいこせし先まづ二月に十五日じゅうごにち以前いぜん子こ其受戒じゆかい乃日にちを定さだめ傳戒でんかい大少たいしやう十師じゆしを東大とうだい寺し戒壇院かいだんいん小請集せうしゆじゆ一いつ教法きやうはふを依より十二じふに難并なんへい小十せうじゆ選せんを問と然しか去る後のち登壇とうだん受戒じゆかいせしむ即すなはち受戒じゆかい畢を後のち戒壇院かいだんいん小安あん置ち一いつ教授師きやうじゆしを差さり百日ひゃくにち乃を間かん比ひ五ご二百にひゃく五十ご戒かい三千さんぜん威い儀ぎを修しゆ學がくせし先まづ允いん誓ちかり國家こくがを護まもり或あるは各本寺かくほんし小安あん一いつ

請こり師し小依止いし志し細こま律相りつさうを學まな以もつ同どう以もつ誓ちか護ごら一いつむ其年そのと二十にじふ了りやう満まん生せい若わかハ七十しちじふ以上いじやう并へい小國家こくが不敬ぶけい乃人ひと債負さいふ乃人ひと黃門わうもん奴婢ぬひ乃人ひと是これ戒器かいき小非故あひや子佛かみほとけ受戒じゆかいを聽きり以もつ頂年ちやうねん唯舊例ただふるいれいを忘却わすれせ或ある乃を了りやう非兼あひや復佛ふつ教きやう了りやう違背いはい志し或ある戒日かいにち小臨りん終しやう官符くわんぷを下くだ新あらた小頭あたま髪かみを剃か初はつ袈裟けさを着き冠かん憤ふん乃痕頭あへ額がく猶存なほぞん志し或ある乃十じゆ口くち以下いげ年少ねんしやう乃人ひと空くわ一いつ名なを貪むさ乃外謀ぐわいぼうありく曾道そうだうを慕こ乃中誠ちゆうせい小一ひとつ皆是みなこれ沙弥しあ乃行をを練ら况いはんや懺悔ざんげ乃事こと小放はなりや亦また以もつ結番けつばん乃場ば上下じやうげを競きやうり鬪ぶ亂らん一ひとつ登壇とうだん乃次つぎ先後せんごを争あり争あり擧あげ擧あげ一ひとつ遂つひ子則有司すなはちを罵のの罵のの一ひとつ十師じゆしを凌あ躐せ以もつ監かん惡あく乃甚いかに勝あり計けいハをら以もつ吏表しへう無表むへう乃戒かいを受得うけ乃名な

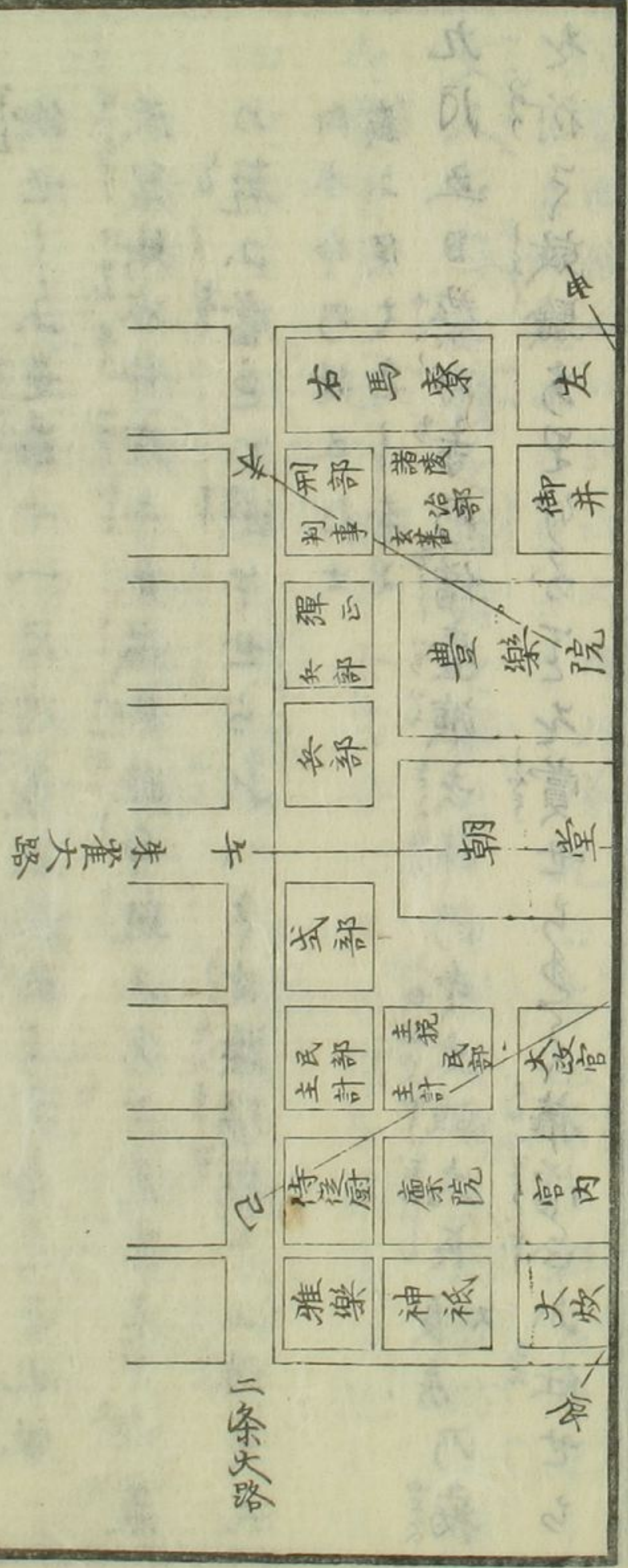
付く受戒と云ふ師七證乃前不於く慇懃至誠了礼を
求め戒を乞乃下非を防ぎ惡を止ふ乃功能を發得生
ふを名付く表戒と云羯磨翻譯名義集云羯磨乃下非
色非心成佛殊勝乃功能を發得生を名付く先表戒
と云既ふ至誠礼敬乃心かゝ安表戒を得ん表戒未得
何先表戒を得ん表戒先表戒を得以何得戒と名付ん
登壇已後律相を學々以故ふ持犯を知と持犯を知と
故ふ安居を修せ以何々比丘と称せんや望請總々舊
例を據兼々佛教了遵ん然ハ緇徒感激志く濫惡自止
戒壇清淨不佛法興隆せ及國上乃豐樂期せ以志く來
内外乃灾障攘去と云且慧運ハ檜尾僧都實慧
乃弟子と真言血脈不

見也又一本了ハ惠果阿闍梨義操
義真惠運と相承せし由見えたり
五月十六日甲斐能登丹後不見周防長門土佐日向八國
不介を置飛驒國不掾を置蓋冷條不上國了介あり中國
子介あり下國了掾ありと云且然不子伴等國前不上國
と為し不介を置て如く數年を経たり今是を改正あり
去人六月十日京畿及以近江國賣買乃輩惡錢を擇以棄
ふ王を禁ら於蓋弘仁十一年六月九日大藏省へ乃下知
不鑄錢司乃進不新錢文字頗明あり以と不體勢を失え
を小疵あり共行用妨あり及猶檢納せへると云不依及
文字全から以と称し輪郭缺ありと云法取を妨く防む
有也了了也とく路頭不牒了衆庶不示也了也
了路頭了

内裏東宮方位圖



一六二
一六三



此圖延喜前乃經營位置子係ると云依く爰に録出以
 東宮 内裏乃辰巳ふ當ふか致了 内裏ハ 東宮乃
 成亥了當ふと知へ 南北は百六十丈 今七百六十六
 東西三百八十丈 今六百四 總坪數は十九万六千六百六十
 六歩餘

を三ら也く選錢乃事を禁 十日日京畿七道乃諸人御靈
會を修む事申ふく私子徒衆を聚め馬を走せ 神事乃走
騎射 神事乃流 走ふとを禁らふ但小兒乃聚戲之制乃限
鋪馬なり
ふあらはと於里八月廿一日太政官乃曹司廳ふ遷御以
天安二年八月廿九日より斯日まへ八年乃間東宮ふ
御せしふ是歲十一月内裏ふ遷御ら敷應ふと也但
天皇御本命庚午是歲御絶命乾ふあり東宮より内裏
ハ乾ふ當也ハ避せせら敷へき中陰陽寮中ふ依ふ
御本命乃説五行大
義ふ後也くあり
九月五日薬師寺乃僧壹演去年乃冬太政大臣良房乃病
を祈く效驗ありけふとを賞せら也く推僧ふ任せら

不壹演僧正ハ弘法大師乃弟 九日太政官ふ群臣を宴く
子真如親王乃弟子なり
文人を喚く韻を撰詩を賦せしめ緑を賜ふ内教坊女樂
を奏む事乃常乃如く十月廿七日百僧を内裏子延く三
日を限里史般若經を轉讀せしむ豫鎮乃為ありと也廿
八日持僧正壹演ふ勅書を賜ひ去廿八日職を禡んを
請申せし表を収ら也以十一月四日伊勢太神宮并ふ明
神十一社ふ使者を遣えし幣を奉り内裏遷御乃由を告
ら也く後仁壽殿く御せふ此後三日諸衛警固く諸司
宜陽門外乃廊下子侍宿也十二月十九日内裏ふ於く始
く佛名懺悔を修せらふ
八年正月十日日 勅ふく女御後三位後京朝臣多美子

小毎年二分官一人典一分官一人生吏を給せら致廿一日
仁壽殿了内宴去く近長了詩を賦せ樂を奏せしめ祿を
賜ふ廿三日諸司諸院諸家諸所乃燒尾荒鎮並ふ人を責
く飲を求め臨時小群飲一被除ふ被物を責ふを禁ら
ふ諸人新ふ官職日拜也又ハ進仕子就とを相違訪去く
宴集を致れ燒尾荒鎮と云蓋天平寶字二年二月廿日乃
勅書ふ嚴禁を立ら也供祭と療患乃外小酒を飲とを得
さ也朋友僚属内外乃親戚暇景あふとさ小相訪向さへ
く先官司子申く然後集とを聴れん若犯と有ハ又
位以上及一年乃封祿を停め六位以下見任を解却し
其外杖八十せよとありし小百餘年乃久くを經く

有司解體一棄く行えさしを紀彈さ也く古不復せし
め集者二十人小過をを聴さると於里赤酒を飲と過差
去く鬪争せば親王以下又位以上を食封祿を奪へとそ
制ら也乃是二月十六日左右京乃米價を定ら致白米一
升口十文黒米一升三十文とか里穀價騰踊乃故あ里
是頃乃一升八分今乃京升九分六勺九撮七抄七小當ふ
口十文乃長年大寶ふ也は銅銀又十月口分あふへし
銀小兌也は一錢六分八釐 今純銀一石六分八釐ハ通
用錢口百七十二文許小當
是許小相當也即是今量一升通用錢口百八十六文許
乃法價也 三斗五升苞一俵十六貫又百十文小當る
也かちち百俵三百五十口兩令乃法法也
是時歲餘く穀價騰貴白米一斛七貫二百文黒米口貫

百女子及び一ノ故と楚一斛七貫二百文お世ハ一升
ノ七百二十文お世今乃法法ふ
文ハ一合一白口撮の法價ニ
廿一日左中辨正又位下丹輝真人貞峯乃姓を多治真人
と改ら教蓋天平六年遣唐使中納言多治比真人廣成入
唐乃日丹輝と改後百三十餘年入唐乃新文を賞一々
所生乃舊字を訛々真理を失入ノ故と如里但多治比ハ
之ノ文類々一々二字ハお世一と楚多治真人乃祖
生産乃又多治比乃花湯沐登乃中ハ飛源乃世ハ依々多
治比古王と名付一と之然るを丹輝と改之ハ花乃名乃
縁を失貞峯ハ廣成乃曾孫形乃三月朔日真言宗乃僧を
以之東寺乃三綱子任一階業を經一者を以之西寺乃三
綱と為へ一と定ら教二日沙弥深寂了姓貞朝長名ハ登

と賜以正六位上ノ叙一右京一条一坊ハ貫を深寂實ハ
仁明天皇乃皇子文德天皇乃弟ハ之母ハ更衣之國氏ハ
兼秋乃初源朝長乃姓を賜一ハ其母過失あり々屬藉を
削ら也仍々出家入道是嘉祥乃末優於おわ一めせせ
時服乃料を給聖躬不豫乃間掌薬ハ侍法也之巾出家
大分ノ故ノ登選の時ハ處分ハ豫せり一ハ善縁遂を再
俗塵ハ落然ら及本姓了復き魚一と云共嗟嗟乃遺旨
ハ母過失あり其子源氏大分を得せれと云ハ依々貞
氏と成入ハ廿三日右大臣良相乃西京第ハ行幸お世
て櫻花を賣一百花亭ハ文人を喚々詩を賦せ一め
五位ハ人ハ位廿八射庭ハ御ら也射以ハ中鶴者ハ布を
人合ハ十人と云

賜小伶官樂を奏し歡宴日を竟扈從乃百官小縁を賜ひ
位を擢る王差あり 古京圖小右京坊城乃西三条坊門乃
南一町を良相公百花亭舊跡と注せ
今御池通乃南千本通乃 西乃田圃の中あり 閏二月朔日大政大臣良房東京
深教乃弟小行幸あり櫻苑を觀せし以釣教あり
釣魚射教あり弓矢を御せし以能文若日落花無數乃
雪と云題を賜ひ詩を賦せし小伶入絲竹を奏し農丈
田婦乃雜樂以下終日樂飲群臣醉宴竟之縁を賜ひ且京
城乃貧窮者小新錢五萬文 舊錢五十萬文不當乃今乃通
用錢五千九百貫文許なり
判金九百兩 飯二千二百兩を給京小近き日十三箇寺小於
西餘なり 金剛般若經般若心經を轉讀せし日暮之還幸般
十日應天門火あり樓鳳翔鸞乃西樓あり 是日廿九日

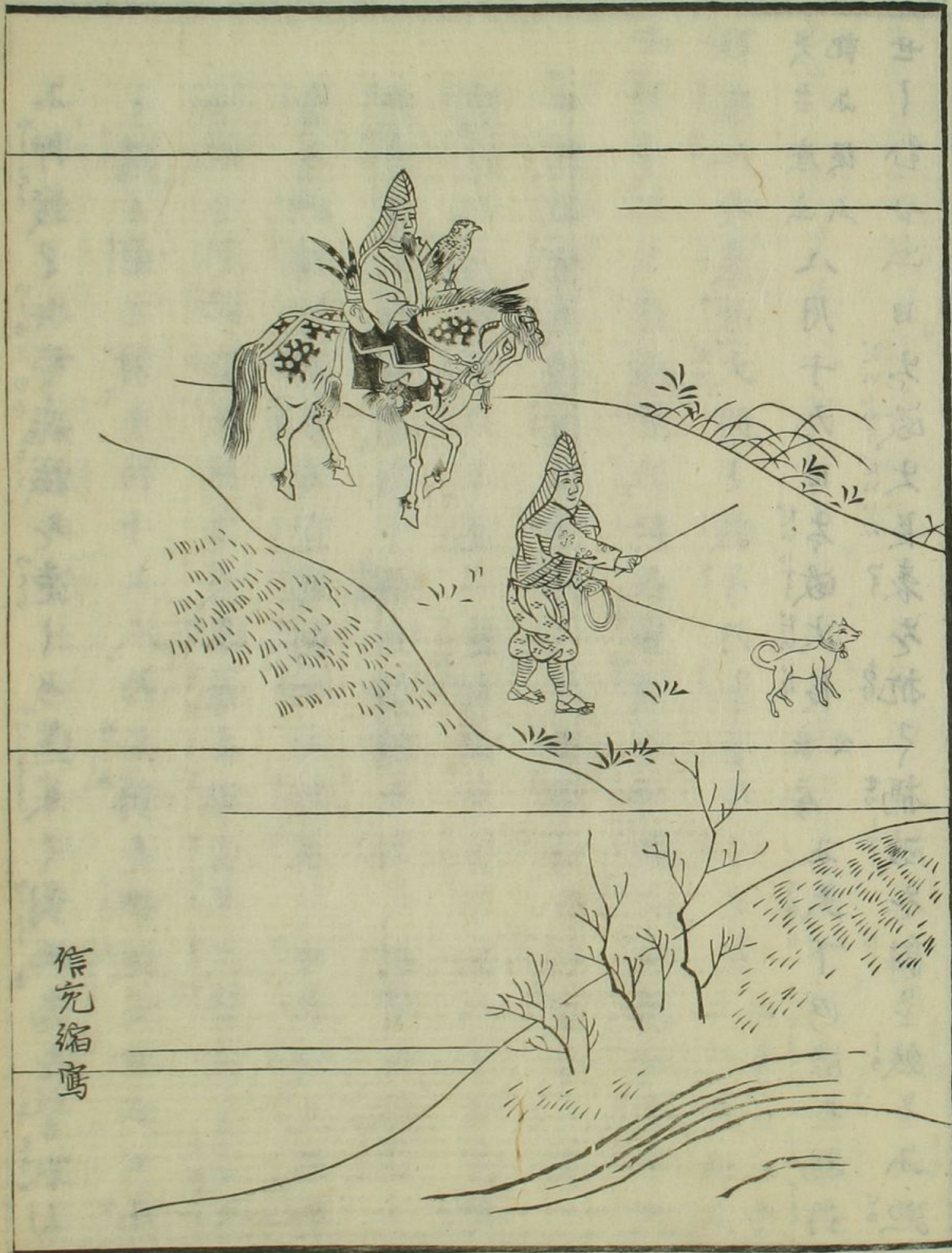
内供奉十禪師傳燈大法師位圓珍 五十三歳智證 小真言
止觀乃西宗教を弘傳去む

圓珍奏言小祖師十禪師傳燈大法師位最澄父師十禪
師傳燈大法師位義真延曆年中 勅を奉し唐請
益歸朝乃日並り 勅印公驗を賜ふを蒙る又師
兄前入唐天台宗請益十禪師傳燈大法師位圓仁 慈覺大師
復命の時上奏し春秋二季小永く灌頂を修し兼く金
剛悉地乃經業年分乃度者なり加へ皆永代不行乃驗た
里圓珍 詔を奉し唐入真言天台西宗乃教文を
傳得く以先師乃遺跡小添く 皇王乃至化を翼奉
せん仗乞例小准し牒身公驗を賜ふ里兼く所由を下

知一カ小隨しゆいハ流傳りゆうでん一國家こくがを擁護ようご一群生ぐんせいを利益りやく一先師せんし乃恩おん日酬にちむ之を謹じん之を求法くはう乃來きた中ちゆうを具ぐ一伏ふく之を天裁てんさいを聽きとあり川がはふ依よ之を故こ也なり但たゞ此時このとき天台たいたい座ざ主しゆハ金輪こんりん院いん安惠あんゑ和尙わじやう六十六十年年

六月六月日日僧しゆ乃飲酒しんしゆ并ひ出家人しゆけじん乃生たう産さんを理を之を禁きん給たまふ廿一日にじゅういちにち延曆えんりやく寺てらふ日條にちじょう禁式きんしきを立たて其その一いつハ准頂じゆんていを修しゆ之を教しやく日職掌にちしやくじやう乃僧しゆ乃關急くわんきゆう其その二にハ舍利會せりゑふ供く之を不職掌ふしやくじやう乃僧しゆ乃關急くわんきゆう其その三にハ寺家てらけ了りやう馬まを養やう入い之を或あるハ人妄ひとまうふ乘馬じやうまを養やう之を佛壺ぶつろを踏ふみ行い一庭てい花はなを食損しやくしん之を自今いま以後以後更さらふ然しか志しむ不ふ之を莫な是これ寺家てらけ了りやう下馬げまれ若し濫犯らんぱん者ものあら及いた一度いちど之を教諭しやくん之を返かへ一再犯さいぱんと云いハ其馬そのまを没ぼつ一寮家しやうけ了りやう送たい之を其日その日ハ山さん僧しゆ義ぎ

服ふく之を着き之を教しやく之を蘇芳そほう深紫しんし青赤しやうしやく白橡はくじやく等らう乃色いろ一切いっせつ之を禁断きんだん之を親族しんしゆく乃與あふ所ところ擅越しんえつ乃施し之を所ところと云い共とも先式せんしき了りやう違ちがハ山家さんけ乃風かぜを損しん之を差違さち犯ぱんせ及いたハ山衆さんしゆ乃列れつハ領志りやうし先せん之を故こ也なり是頃このころ尾張おとぎ國くに廣野ひろの乃河がは口くちを掘開ほりあ之を乃有あり一ハ美濃みの國くに各務郡かむぐん大領だいりやう各務かむ告雄こゆう厚見あつみ郡ぐん大領だいりやう各務かむ吉宗きちむね等らう兵へい衆しゆ七百しちひゃく餘騎よりのりを率ひら之を河がは口くちに嚴木えんぼ掘開ほりあ乃役やくを奉ほう之を不郡司ふぐんじを毆傷おひがうけ役使やくしを射殺しやく之を七月しちがつ九日くにち尾張おとぎ美濃みの兩國にこくにハ官符くわんぷを下くだ之を也なり亂らんを靖しづめ出功しゆくを畢は之を下知げちせら教しやく同どう十又じゅうまた日にち太宰府たさいふより馳驛ちやくを立たて申まけ之をハ肥前國ひぜんくに基肆郡きせぐん擬ぎ大領だいりやう山春さんしゆん永藤えいとう津つ郡ぐん領りやう葛津かつつ貞津さだつ高木たかき郡ぐん擬ぎ大領だいりやう之を刀た全ぜん彼かの杵き郡人ぐんじん永岡えいおか等らう新羅しんら人じん珍賓ちんひん長ちやうと共とも之を新羅しんら國くに



信充縮寫



古王佐
野
行幸圖
中を鈔
畧
鷹狩の
吉舛を
證

水一ノ四十二

小押渡里兵弩器械を造りて還來り對馬島を撃取り
と謀る由と射手に十人乃名簿を注進せ廿六日尾
張國より注進出けは各務吉雄吉宗大勢より寄東
倉を斫壞し沙石を運積河口を埋塞し中島郡人磯部
逆磨等三人を射殺し猶百餘騎を引く河邊を往還し
隨進乃兵を催進せ速に追討使を下されしと即
日太政官美濃國へ下知し吉雄等を推彈せしむ
七月十二日傳燈大法師位寂澄を傳教大僧傳燈大法師
位圓仁を慈覺大僧と謚号乃勅書を下されし代實録ふ
天台座主八月十九日太政大臣良房公天下乃政を攝行
記ふ從ふ廿二日太政大臣表を抗し攝政を辭せ然るに延
世しむ

若災異若藤里内外騷動を以て理且公乃助了依と
ありく免せし廿二日太政大臣表を抗し攝政を
辭以て云共省せらる

九月廿二日大納言伴善男右衛門佐伴中庸同謀者紀
豊城休秋實伴清繩等五人應天門を燒了坐せらる
不當と云共詔去り死一等を降し並ふ是を遠流
子處を善男より伊豆國京を去り七中庸の隱岐國京を去
里豊城の安房國京を去り一十秋實の壹岐島清繩の佐
渡國京を去り一十相坐せらる配流子處せらる者
八人肥後守紀夏井の土佐國下野守伴河男の能登國
上総推母椽伴夏敷の越後國伴冬満の常陸國紀春道

上総國伴高吉ハ下総國紀成城ノ日向國伴春範ハ薩
摩國と抄聞之善男ハ左京人ナリ後又位下左少
辨繼人ノ孫ナリ父ヲ國道ト云延暦四年繼人大伴行
良と共に申納言後原種繼卿ヲ射殺シけ不依之繼
人ヲ獄申ス死シ國道ヲ佐渡國ニ流シ之け皇孫ハ
國道聰敏ナリ頗才ありハ國宰優愛ナリ同
廿二年赦シ會々都ノ入次第ハ昇進留滞ナク後位
上ノ冬儀ハナク也大善男弱冠ノ時上皇
皇ハ侍奉養和八年大内記ニ為シ同十年式部大進ハ
之後又位下少々後累ハ超越シ正三位ニ叙シ大納言
ハ隆聖天皇太后宮大夫ヲ兼大皇躬顯要ハ任シ録等

倫ハ過云三位食封百二十戸位田正十町大納言食封
東北米今量二千二百八十八石斗二升餘ありハ
日斗ハ八千石に十六俵余ハ當リ其他ハ分ハ及
ハ季乃録猶賢王ヲ知シ人ヲ臨シ己ヲ立ンル為ハ宮
闕ヲ燬ハ虐ヲ罪ヲ犯去天眼ヲ隱掩ト謀リ不子其後
若生江恒ハ左京人備中權史生大初位下大宅首鷹
取乃女子ヲ殺セシメ皇發覺シ八月三日鷹取ヲ告ラ
也日鷹取ヲ禁シ左檢非違使下下七日冬儀南淵
年冬儀儀後原良繩勘解由使局ハ於ケ伴善男ヲ鞠問
せラ也廿九日伴中庸ヲ左衛門府ニ禁メ又生江恒ハ
ヲ携評シ廿日恒ハ謀ヲ同去大皇ハ伴清繩ヲ携評
せハ其事實明白ハナクハ如斯行ハ色ハ形ハ個

善男乃斬罪を赦すへふは 仁明天皇乃功長と云且
毎年八講會を深草山陵に設たりし事を勞と爲也
と也と楚

十一月十七日皇太后東宮より遷り常寧殿に御坐是日
能登因幡伯耆出雲石見隱岐長門太宰等乃國府に差所
乃健兒統領選子等荀人流に預り之より曾才罷か
徒了爪牙乃備と称をのり且蟪蛄了たも若は國司等勤
試練を外精兵ふ之と云と無也とある勅書を下さる武
み怠惰せし邊要乃國司を擢擧せらば萬世無疆乃武威
防禦を開闢かきせし勅書を拜ふに北御齋乃武藝乃端
源を深思 十八日二品式部卿忠良親王に鷹二聯鶴二聯
左大臣源信了鷹二聯鶴二聯を養ふを聽せ廿九日

二品仲野親王に鷹二聯鶴一聯中納言源融了鷹二聯鶴
二聯内膳正連枝王に鷹二聯丹波推守坂上貞守に鷹一
聯近江推大掾安保之寅了鷹二聯を養ふを聽せ
貞觀元年御鷹乃負を停らば攝政良房乃意お
く唐太宗即位乃初舊苑中乃籠鷹悉く聯を断く去ふ
但ら此大分先蹤を追はたふからん是歳 天皇寶算
十七文武を講習し國威を顯耀せんと乃 敬思お
親政乃今此事を聽せ邀に仁徳乃百舍野途く延
曆乃交野天長乃北野承和乃芥川箕津野乃古事を追
せんと爲へし忠良親王此年十八歳信公此年五十
七歳融卿此年十八歳共了 仁明天皇乃弟お

天皇乃從祖叔父みま當分仲野親王あつののちか桓武天皇乃十

二子此年七十又歲家室乃長者大皇

十二月廿七日從五位下藤原高子ふじのたかこを納いれ女御にようごと以

高子乃中納言長良卿乃二女深殿后乃從弟女御此

年廿又歲伊勢物語いせものがたり小昔男こむかしをとこありけり懸想けんそうしけり女乃

許小慮尾藻と云者ゆるおのを遣やとく

思おもあらは葎むら乃宿やど小麻あし乃將まさ為なり引ひ敷物しきもの小こ社やしろをし筒つ小

二條后乃未帝みかど小仕奉給つかまつりたまとくた入い入い御座みま乃分時

乃之般はん也なり云い及およ此高子このたかこ乃事ことあり昔男むかしをとこと云い及およ在あ在あ業

平朝臣ひらあそみを指さと云い業平朝臣あつひらあそみ廿年このとし十二歲ふたじふさい右馬頭みぎうまがしら小

從したが位ゐ下くだ大おほ上のう信のぶ充みつ謹つつしと云い代實錄たゐしりやくを讀よ小こ天皇親政

乃初はつ後夷ごえい乃弊風へいふうを紀たづ小姑息ここ乃流俗りゆうぞくを革あらら也なり大實乃

舊觀きゆうくわん小復かへ延曆えんりやく乃聖蹟せいせき小派はと也なり人ひとを准のりと成な也なり

程ほど小大政大臣だいていしん良房らふぼう右大臣みぎのちん良相らうさう左近衛さきんゑ大將だいていしやう藤原氏ふじのうぢ家

等ら上表かみへ去さり河帶かたを解とんとを請こ小必深意かなたふかいありけり實

録ろく乃撰者せんしや忌諱きげん觸ふりか故ゆゑ了し刪削せんせつと實じつを諱かひせ

を遺恨いこんと云い小高子たかこ乃失行しつぎやう乃婦人ふじん至尊しそん小親近しんじん也なり

其德操とくさう有ありあらけり然しかふり是これを議ぎを敷し小及およりけり

其兄そのあに基經もとつねを云い位ゐ了し隆世たかよ中納言ちゆうなごん進しんむ斯このこと人ひと是これを階か

とと遂つひ小霍光くわくかう乃權けんを擅ありし王室わうしつ初はつと微い了し帝德ていとく殆たいてい蝕しやく小

幾いく萬機まんき藤原氏ふじのうぢ小歸かへ也なり然しかと云い共とも六孫王むつそんわう坂東兵士さかとうへいし勾當こうどう

を領りやうせし後裔ごえい孫累代そんるゐだい其職そのしやくを嚴武德げんぶとくを服くとくとく宿衛しゆくゑい

鎮守一以之紫微乃警衛不供奉之百年外一初之
大元慶元年庚子天皇崩御上皇鎌倉右幕下乃義
兵を揚一治承元年庚子上皇五庚子之百年
七百廿年外一上皇威六合了普く徳風に海了外上
元慶元年庚子上皇慶長五年庚子了皇
十二庚子終了七百二十一年外上
を關多く上蓋聖神明通乃餘烈不頼了然外中惶惶
怖不堪也

九年二月廿七日左右近衛左右兵衛左番子公結一左
右馬寮未調乃御馬を賜了騎了京内を夜行せ了む頃日
内外飢乏不依了人庶飢了阻了盜賊群起一人を掠奪了
屋を窺ひ火を行入了故を皇二月十二日皇太后を常寧
殿了曲宴了皇了皇暮了及入了了觴を奉了壽を祿了宮

僚大吏上皇始了舍人了皇了了饗祿を賜入了差也皇
日女御後三位原多美子上皇三位を賜入二月廿二日
常平倉乃官米を難志米一升乃直新錢八文了和是
外内外飢饉了穀價騰躍せ了了米一斛乃直新錢
一千四百外及了和故了和里 一升乃直新錢十四文外
八年二月一升七十二文乃一倍外也ハ 舊錢百四十文外準了貞觀
今時乃法價了百文外五白余外也
常平倉ハ漢乃宣帝乃時大司農丞耿壽昌乃請了依了
邊郡外倉を築了和穀賤時了其價を増了糶以了農を
和了穀貴時了價を減了了難也常平倉と名付ら也了
を始了以 宣帝五鳳四年乃了日本崇神天皇四十年
天皇敬慮治國平天下急了了和書を讀了了

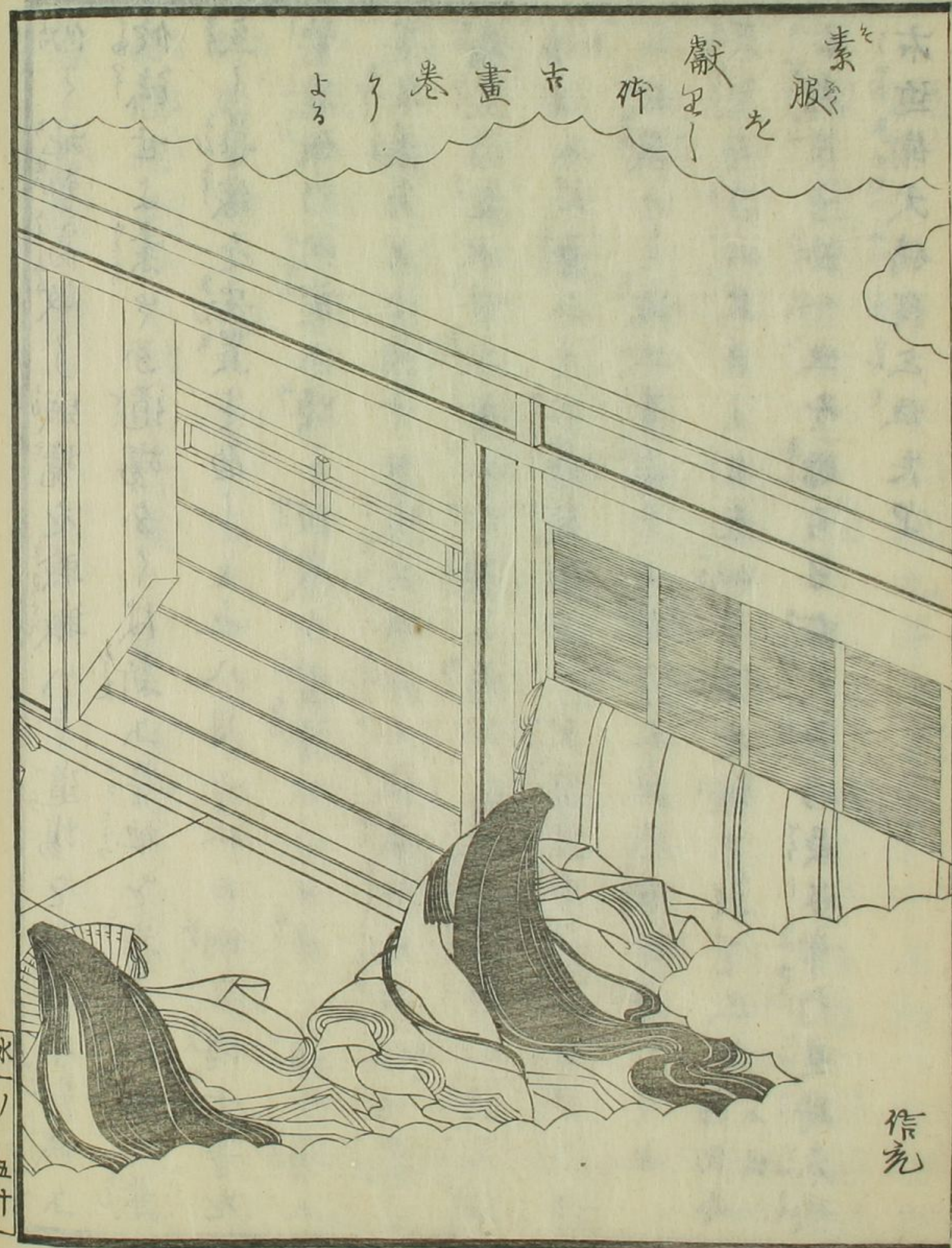
好ませ玉ふ故了異國の事より小民了便よきは采
用ひらせし故分極

五月十日穀價貴く東西京飢饉甚きよ依 勅書を下
す教錢を用也教乃通輕便を取有無利を均し彼是宜を
得者如里如向ハ諸國ハ吏民貯蓄あり京畿乃士庶費用
乏し既不利を均す教乃義ふ乖ふ宜を得乃方了違へ里
嚴制を下さく更ふ然ふを得て取く所有の錢盡皆官
子納し價を正税を以て賜ふへし 正税を錢ふ替へ納ふ
由京外遠ふ切由亦正税を用ひよ如藏し進以他乃為
ふ告ら敷く一とあらは違勅乃罪を科せく其蓄錢を五分
ふ一分は告者了給ひ五分官ふ没せよ但伊賀迎江

若狭丹波紀伊等乃國々禁乃限らば以と延暦十七年
九月廿三日乃格嚴重おとす而令富豪乃輩格乃旨を
慎ま以猶貯蓄を競ひ富強乃名了奪り通用の理おく鑄
作の費を増よらるる伊賀伊勢志摩近江美濃若狭越前
丹波丹後但馬山陽南海太宰乃國府等遠し所有の錢先
格了依く是を行へ隱藏志く進まは科罪も亦前乃如く
おせ唯告言了五分の一を給人 勅到乃後二十日乃内
子鑑數を勘録し専斷了言上せよ搜勘期ハ違え以て
特了褒擢をかへん若 勅了違えく曾く寛宥せ以て伊
賀近江若狭丹波紀伊等乃五箇國ハ貯蓄を禁し資用
を聽せと形也

延暦十七年より貞觀九年に至る七十一年形其際自
然了弛急せしむく例也然らば忠仁公良房乃攝政大
是等乃事を及檢察せらむとせしむく不や今乃勅書
不對し執事乃諸公卿戰慄せしむくを得以
廿六日八幅口天皇像又舖を造しめ伯耆出雲石見隱岐
長門五國を下し國分寺及八部内練行精進乃僧口口を
請し像乃前不當く宸勝王經口天王護國品不依く畫を
經卷を轉し夜を神呪を誦し春秋二時別し一七日清淨
堅固了法了依く薰修せしむく中を國司了下知せら敷蓋
彼國地西極了在く新羅了道了警備乃謀他國了異か不
盈し尊像了歸命し賊心を調伏し突變を削却せしむく

仍く地勢高敞了賊境を瞭瞰へし道場を點擇し勤誠不
修法せし素き道場かくは新し善地を擇し仁祠を建
立し尊像を安置せしむくと也八月十二日明經博士等を
紫宸殿乃御前不喚く經義を質難せしめ畢く祿を賜ふ
と各差あり十月十日右大臣正二位兼原朝臣良相薨
天皇乃皇祖母太皇太后順子及ハ天皇外祖母太相國
良房不は弟不く二等親也天皇皇母皇太后明子不
也叔父不く父二等親也是共く三月乃版を著へし也
天皇其右大臣と云を以く事を視せ敷と三日儀制令
右大臣了正一位を贈らむ右大臣乃長子常行是時冬儀
右近衛大將從三位大上



十年正月二日太極殿乃最勝會入音樂を奉以皇太后御
冬あまは形里 十月十日よ里此ふ至る八十三 七日叙位
乃次正六位下式部少丞兼原朝臣志方了後五位下を授
ら敦又右大臣良相 薨去後八十八日な里と云共式部
少丞考課を勘向志敦職ふく久くく曠く爲へく以
依く情を奪く起復せくむ

晋乃山濤母乃表了居けを詔去く濤を以く吏部尚
書とふく情を奪く職了就くむ濤己を得て起く職ふ
就くと云里 晋吏部乃皇朝乃式部乃 天皇是等乃
古事を思食れく子や

十六日踏歌乃宴竟除目乃次参議右近衛大将後三位藤

原朝臣常行を讃岐守とふ以餘官故乃如く又右大臣薨
去く後九十七日な里近衛大将乃禁衛巡檢乃重職入く
國司乃百姓を字養以農桑を勸課く所部を糾察せへ手
劇務あり依く強く復任せくめら敦くあらん

右大臣食封二千戸	箱八萬東	職田卅町	箱一万	正二位
食封二百戸	箱八位田六十町	箱三合	合せく箱十三万三	
千束ふ當る米今量乃六千旧百旧十八石九斗七升許				
か里 旧斗八一萬六千此外了口合田乃收と季禄あり敦				
身く但是乃右大臣乃身ふ止ふ身亡き後及共ふ没せ				
讚岐守乃公廩凡今量二千三百十口石二斗一升八合				
餘ふ當るは 旧斗八五千七百 是を参議近衛大将後三				

位乃食封百戸 千束 位田三十町 七千束 合稻二万子
東の米今量千十八石二斗五升餘 百石十五俵余 通
計今乃八千三百卅一俵餘を給せら給くと知へし
分と季祿を別を是 天皇大將乃暴不貪く成を憐
給人恩賜と聞えし

廿一日仁壽教了内宴せしを文人を喚く詩を賦せ
去め内教坊を女樂を奏せし免宴竟く祿を賜ふ
差あり廿五日 詔を公卿及び諸儒下し去十八日
野火ありて田村陵を燒損ひしを深く怖畏させ玉ふ
是を禮制了依く勘申せし有く大博士大春日雄絶其
先人乃室不焚とあはれ三日哭せし禮記に見えたる

據り行をせらふへしと申以文章博士巨制文雄ハ漢書
ハ武帝建元六年四月高園便殿火帝素服を敷て五日昭
帝元鳳元年五月孝文廟正殿火帝及び群臣皆素服せし
あふ了後をせら給へしと申以公卿文雄ヲ議不准し
行を教へし位を奏せし不許す 天皇正殿を避く錫紵
を服し常膳を撤去し蔬菲を進御し朝を輟ふと五
日公卿及び諸乃近長教飾を失くし凶儀不准せし也
大納言後原氏宗大學生潔世王を使ふ事乃位を告大
まの御陵守等乃罪を勘へ科せら給十二月五日 敕使
を京に迫りて十箇寺及び平城乃十箇寺を遣へし轉
經せしめ功德を修しむ蓋皇太后 明子 春秋に十不盈玉

入を賀し猶餘尊を禱せ玉とんと如也七日皇太后を常
寧殿了曲宴し王公卿皆侍し竟日歡飲おし給ひ是日京
中乃貧人を朱雀門子召集し物を賜ひ九日皇太后宮乃
大史亮大進少進及ひ侍女等皆爵一級を進め玉入十六
日夜分女御正六位下後原高子皇子を深殿院に誕生し
拾芥抄に陽成院大炊御門乃南西洞院乃西件院に御
誕生とあり共三代實録了深殿院に誕生し一ありは
記さぬ是に今是より後高子乃兄基經大政大臣良房
乃養子と志す深殿院了住也且初基經夢了高子庭中
に露臥たると其腹脹満頃くありと腹潰氣昇ると天了
屬し臙と日と成と見しは是必天子乃母たると
承一ノ五十三

意小秘之掖庭了出立也 天皇十九 高子廿七 何他處を以て
産所と為へんや

廿二日太皇太后頃六十僧を東五條宮に請し薰修講經
せし先京師貧窮者を朱雀大路了會し物を賜ふ春秋六
十ニ滿玉入を賀し以て修善せらるる形也
十一年正月己未朔朝賀を受むる宴を侍了賜入玉
を停ら敷去年閏十二月廿八日左大臣正二位源朝長信
薨せし故お里大臣乃表ふ 天皇事を視せ玉と三日と
儀制令ふ云里二月己丑朔貞明親王を皇太子と定む入
由乃 詔を公卿以下五位以上を庭了於て六位以下を
承明門乃外に於て受しむ是日大納言正三位後原氏宗

を兼東宮傳と一文章博士從六位下攝廣相を學士と以
九日五十僧を東宮了延く大般若經を轉讀せしむ近
皇太子遷御玉をんう為了豫鎮せし勢玉入十一日東京
深殿乃第よし皇太子東宮了入せら敷 誕後八日
十二日大納言正三位兼行皇太子傳藤原朝臣氏宗參儀
民部卿正二位下兼行春宮大史伊豫守南淵朝臣年名參
議正二位下行左大辨大江朝臣音人從二位上守刑部卿
菅原朝臣長是善從五位下上毛野朝臣永世勘解由次官從
五位下紀朝臣安雄等 勅を奉りて撰大史一貞觀格十
卷貞觀臨時格二卷を上ふ

貞觀格貞觀臨時格共了今亡ふ蓋其序弘仁十一年

二月廿一日格十卷を施行を如今時五代を歴 嗟峨淳
文徳當今年六旬 五旬ふ及入文質暗了遷り沿革自
と五代 改へし及入文質暗了遷り沿革自
聖る 詔草臺閣了盈文案縑囊ふ溢分法滋章を止免
令頻變を除く所以ふ非と云 詔志く舊格を因修し
新符を綜緝せしむ弘仁十載乃明年ふ起り下貞觀
十年乃晚節ふ至ふまゝ成規を列郡ふ擇ひ故實を官
曹ふ搜り事先格と異ふ者ふ奉り是を取理舊制と
同者ふ推りあを棄とあり其意旨弘仁乃成規故實
五十年乃際ふ施廢たふを改正ふとせんり為と聞ゆ
蓋弘仁十三年二月十七日 嗟峨天皇御位を皇太弟
淳和天皇ふ禪せ給入後閑院大臣左相とて啓汝也

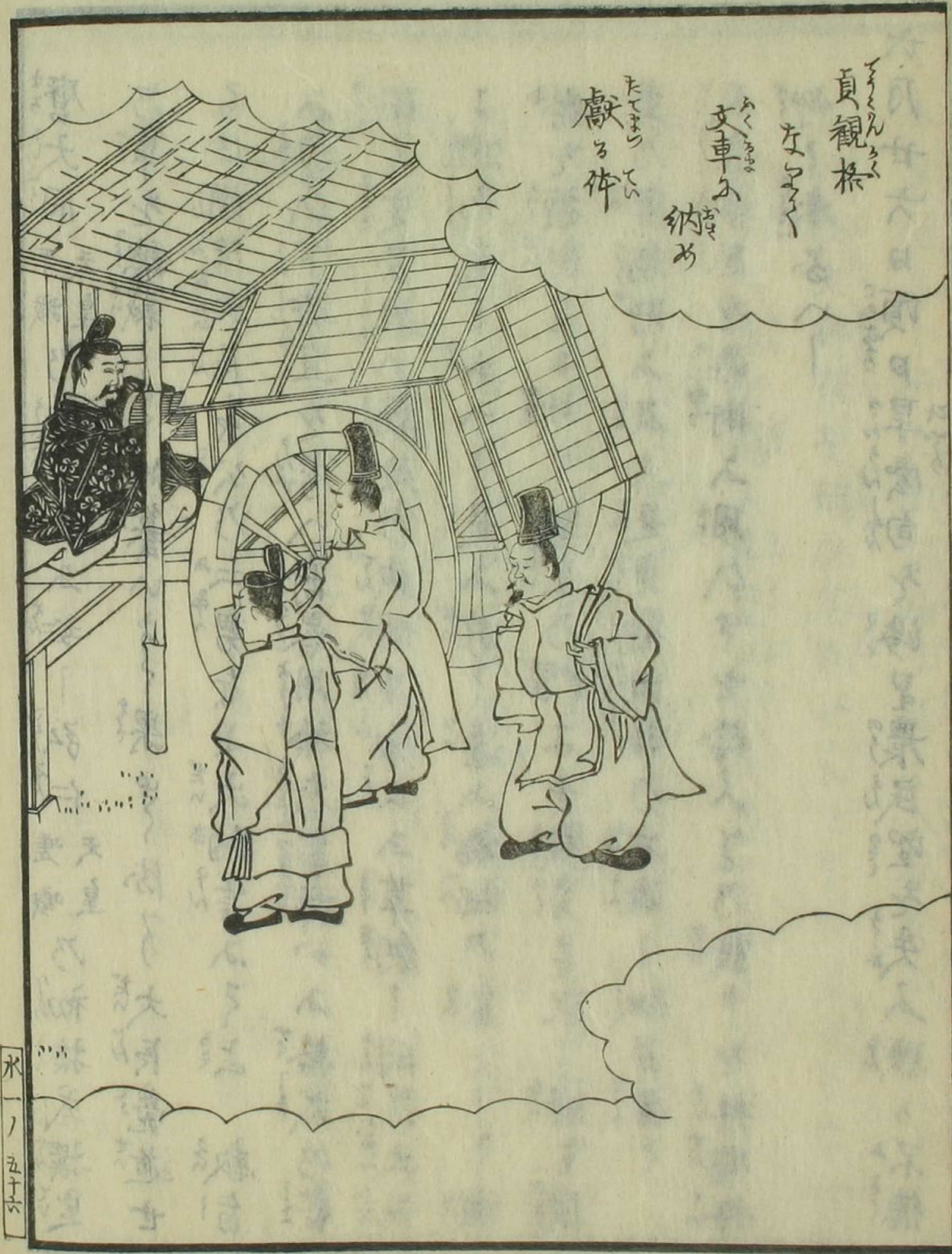
一、家處頗多、折大織冠、簾子謀、入鹿を殺せ、功を以
て内良大錦冠を賜ひ其死せんとせ、教子及て大織冠
と大臣乃位を賜ふ其翌日大臣薨る然る時大織冠
朝つ三日大臣了列せし、非を其長子淡海公、不比大
寶制令乃攀、不領、和銅養老乃右相、大皇、且神龜、聖武
勝寶、孝謙、二帝乃外祖と云を以て藤原初朝、重
公乃長子、武智磨左大臣とあり、僅ふ七日ありて薨
其子豊成右大臣、子陸、且仲磨、大膳、大皇、その後、叛を以
て謀せらば、子弟皆座せらば、門葉もさへ絶んと以て、冬
議房前淡海公乃二男あり、病ふ罹り、暴ふ薨り、相位ふ
昇らば、房前乃男、真楯、大納言、子薨り、大皇、子其子内

磨大同、平城乃右大臣、み班、弘仁、嗟、乃初格、式撰、定
乃車を總裁、一々修纂、いさゝ果、いさゝ依、大長薨、逝、世
ら、内閣院、大臣、公乃二男あり、大納言、みさよ、敬、旨
み、導、ひ、下、時、宜、を、考、へ、高、累、用、捨、考、審、詳、か、み、格、式、以、書
漸、く、定、る、然、ハ、朝、廷、乃、典、刑、淡、海、公、み、草、創、一、内、院、大、臣
子、潤、色、也、と、云、へ、一、是、み、於、て、遂、み、執、柄、乃、家、と、一、一、機
務、を、擅、制、さ、る、故、に、驕、急、乃、門、子、を、教、育、を、教、了、耐、主、陵
夷、乃、弊、朝、野、み、及、み、是、貞、觀、改、格、乃、本、源、と、知、み、謹、く
天皇、敬、思、を、治、術、み、用、ひ、さ、を、給、み、と、乃、敦、き、を、拜、瞻、拜
仰、一、奉、み、へ、一

六月廿六日、頃日、早雲、旬、を、海、里、農、民、望、を、失、み、朕、乃、不、徳



信九



貞観格

左ノマツ

文車

納め

戯作

水一ノ五十六

ふし々百姓何の事らあれ躬を責く寅畏へ一朕ら服御
常膳等乃物並り減撤せべく左右馬寮乃秩穀一切不推
絶せへ一左右京職不命く道瑾道不死人あり尚或是を
を收葬せしめ園行乃内り完結あらは使者を遣せしめ
勤く理を申ふ天安二年以往乃調庸乃米乃未進乃民乃
身不生色乃皆從く蠲除を極しとある 勅書を下さる
爰に於て七月二日太政大臣良房大納言氏宗中納言融
中納言基經冬議多冬儀常行冬議生冬儀年名冬儀善繩
冬儀音人等奏す申すく臣等去月廿六日服御常膳減撤
乃 勅書を擊讀く感歎く膝を伏侍五位以上乃封録也
亦暫く減折せしめく織塵を崇徳不禪く消滴を谷水く添

可き也き
君臣體を令せ豊儉を同くせんと奏を奏乃出く
謹考人あらず服御を年料乃御衣常膳を日々乃供御と
聞ゆ 天皇是等を減しせ玉人は禮記八年順成を
らさ也皮素服素車と云ふ原川湯乃旱を救ふ素車
白馬と尸子云ふ准里唐太宗貞觀二年旱蝗を以て
躬を責大赦せら也一故事不據也一からん此等乃と
聖明乃睿思を發せと云へり也共本文學乃匡翼を於
處あきふ非を群長五位以上封録を減せら也一也後
世半給乃組と云へり
頃日豊前國乃貢調使新羅乃寇盜了遇く標掠せら也一

かば是日大宰府乃司小諸國九列貢調使使領將一時共
不發一先後あおへく々々然あつ豊前一國を々々獨先
進發せしめあかば野人飢虎乃ほふ乗し新羅乃寇盜隙
を窺ひ侵掠を致し唯官物を失ふ乃之を非を兼り又國
威を損辱を是を往古了求あつ前例をふとなく後來了
賄く面目無あへく使人あせ責へくと云共折所大宰府
官司乃急情と云へく或云盜賊逃去乃日海邊乃百姓五
六人死を冒し射場し追戦と此事若實あらば忠教と
云へく然あつ言上せ以善を掩ああつ以中と云 勅書
を下せせく謹責あつあ十二月五日大宰府言上あつ
云く往者し新羅乃海賊侵掠乃日統領選士等を差遣く

追討せし免んと擬を然あ人皆懦弱あし思憚り行者
かし於是像因兵士乃罪あ里く九列を調發し御るる膽
累を以てし特了意氣を張ああつ一念殆十倍あ當あ
抑彼等ハ常あ遊獵を事とし徒あ課役を免せれく多く
官糧を費せ里請あつ百人を一番とあ一別當を置二番
のい毎月交替せし免ん其粮折を諸國所奉乃俵料利福
を給せんと請申せしあ五十人を一番とし選士乃事あ
堪たふ者を奉く長とあく勾當せしめあ其以外ハ請乃
あく寸へくと 勅裁あ里く十三日從又位上守右近
衛少將兼行向波介坂上大臣孫瀧守を大宰少貳あ任し
鎮西了發向せしあ廿八日瀧守あ鎮西あ是朕く外朝く

千里の符を分ち一方の重を寄况す隣國と壤を接以
非常期切々龍守警固の事を勾當せしと 勅定有
去りば龍守謹く奏しけふを選士を置甲冑を設ふとの
警急了備へ不虞を護らんを為さ里然ふ博多津ハ鄰
國輻輳乃津警固武衛乃要害かふ不擲と鴻臚と二驛を
隔り今之里廿に丁あり令乃に十一里二百廿八歩ハ當
る驛と驛と乃間二十里と令ハ見えたる考合せ
し若兵不意了出は倉卒了備切々請統領一人選士に
十人甲冑に十具を鴻臚ハ後置しは前々乃定かふ今
選士百人毎月番上し尋帯乃具良を改く不意乃禦し備
又例番乃外更了他番乃統領二人選士百人をかえんと
申し去りば免る角ハ龍守の計大ハ趣しと許さ色々也

石清水神社奉幣告文去六月以某大宰府度々言上
せらく新羅賊船二艘筑前國那珂郡乃荒津ハ到來々
豊前國調を貢る船乃綿綿を掠奪し逃退た是と見ゆ
那珂郡荒津ハ玄海灘乃地方ハ博多と境を接以
天皇邊ハ備ふハ警策の嚴密か否を窺知へし
十二年正月十二日壹岐島ハ甲冑并ハ手纏各二百具を
免ら敷是々新羅ハ備ふハ大允於是
手纏トハ倭名鈔了射鞬乃字を訓た是及今乃了敷と
知へし
十八日大宰府乃甲冑百十具を鴻臚ハ遷置廿八日饒益
神寶を改め貞觀永寶乃錢を鑄せしむ一以之舊錢乃

十小當

承和八年閏九月廿九日乃官符本年料造錢二千八百貫文と云ハ饒益神寶也亦年料二千八百貫文を造里貞觀元年より里十一年外至之六万八千八百貫文不及ふ又當時舊錢と稱せし長年太寶也嘉祥元年より天安二年まで十一年乃間鑄た不處外也ハ又之六万八千五百貫文あ不處し新舊數同去之舊ハ賤く新ハ貴く交貨妨多し所以然也

二月十二日太宰府言上を承りやう對馬島下縣郡人卜部乙屎磨鷹鷄鳥を捕んる為不新羅乃境不向不處新羅人不執ら也之獄了禁ら不然也彼國人材木を挽運ハ大船

